みんなの文芸

引間豐作選　投稿数23句

灯を恋へる馬追闇に放ちけり　三沢　新井　民子

(評) 馬追いはきりぎりすの仲間で、すいっちょのこと。体は緑色で髭とよばれる触角は、身体の倍も長く休まず動かしている。人の生活圏を好み家の中まで這入って来て鳴く。昔は家庭で織っていた手機に来て、織りかけの生地や糸を咀み切った悪戯もの。今宵も灯を慕って部屋を訪れ鳴き始めた。叩くのも可哀相と捕えて庭隅の茂みの闇に移してやる。さりげなき自然を慈しむ詩人の優しさを垣間見せた一刻を愛でる。稲光りの句、打ち拓くの措辞がその一瞬を的確に捕らえている。虫の闇の句、ひとりに戻るがいかにも手足れの表現。

稲光り一気に峠を打ち拓く　下田野　藤田　稔

客送りひとりに戻る虫の闇　三沢　真下　杏子

庭端に気高さ誇る芙蓉かな　下日野沢　田端　マサ

風誘う薄暮にゆるる秋櫻　国神　松岡　千恵

幼な子は蝉の抜け殻集めをり　皆野　桜井　早苗

秩父路やライン下りも秋の風　下田野　藤原　道男

虫の声聞きとめしより増えてゐる　下田野　中田　久恵

戦争記孫に伝える夏休み　皆野　大沼シヅ子

がうがうと余波の雷火は闇に燃え　金崎　設楽　武子

いつのまに燕帰りて軒しづか　下日野沢　植木　豊子

緑食み印おのおの肥後の牛　金沢　青木冨佐子

サングラス外して戻る農の顔　皆野　新井　茂

中田國太郎選　投稿数13首

月蝕の放映見つめ外に出れば月光淡く雲より透けり　上日野沢　四方田利男

(評) 待ち侘びていた月蝕のテレビを見つめ、秩父の月蝕はと、外に出て見ると生憎の雲により「赤い月」は見られなかった。その放映と現実の宇宙とのコントラストが面白い。特に下の句の「月光淡く雲より透けり」の表現力に作者の力の進歩を感じた。現実の自然や社会の観察を、いかに苦労して作者の言葉によって表現するかが、その歌の生死を左右すると思う。茂吉の月を詠んだ歌の一つ「しづかなる峠をのぼり来しときに月のひかりは八谷(やたに)をてらす」に強く惹かれる。真下作、「二戸となる米作り」と、塩田作、夫の兵の日の心の傷痕の深さに胸をつかれた。

産土神の裾の山田に出穂揃う村に二戸となる米作り　三沢　真下　杏子

兵の日の夢を見しかな猛暑の夜夫の異様な声に驚く　皆野　塩田　千代

ひねもすをエイジングケアに心して満ち足る日日をいとしみ生きむ　皆野　新井　愛子

高齢の料理教室加はりて和み含まる肉ジャガ旨し　三沢　新井　民子

ふんわりと町空に浮く飛行船曰幼に返りはしゃぐ防災の日　皆野　金子善次郎

震災の爪跡残る越後路に恃みの稲穂頭を垂れる　三沢　新井　叶子

感動と興奮なせる陸上の世界の選手にエール送りぬ　金崎　山田　雅子

雨・蜂に耐へて育林はげむ夫も山と別れて一周忌無念　下日野沢　山本ミチノ

老妻とこれっきりかと旅に出る楽しく無事で成田に降りる　皆野　新井　茂

宵迫る町をあげての合歓の盆花火も囃す夜の更けるまで　皆野　笠原三江子

枯れおれて淋しげ枝に葛の蔓覆い被りて辺り見下ろす　下田野　安井　光代

俳句・短歌を募集

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して企画課へお寄せください。

8日必着

1人1句、1首に限ります。